

アナンシと五

2018.3.29. / v. 2

<一人操作版>

| 1

■ 人形 ■

- ・アナンシ
- ・ウサギ
- ・アヒル
- ・ハト
- ・魔女

■ 大道具 ■

- ・窓のある魔女の家（回転）
- ・サツマイモの山（5つ）

■ 小道具 ■

- ・大鍋

■ プロローグ ■

語り

「むかーし…あるところにアナンシという化け物がいていつもお腹を空かせていました… [アナンシを出し] これがアナンシ…アナンシがいるところの近くに [片手を広げで示す] 五…という名前の魔女が住んでいました…魔女は自分の五…という名前が大嫌いで もっといい名前を呼んでもらいたいと思っているのに みんなはやっぱり五…というものだから 五はいつも腹を立てていました…



■ 魔女の家 ■

語り

「[魔女と大鍋をセットした魔女の家を下手に出す] ある朝 アナンシが魔女の家をのぞいてみると [アナンシを窓からのぞかせながら] 家の中では魔女が大なべで魔法の草を煮ているところでした…魔女は魔法の杖を振り上げて恐ろしい呪文を唱えました…



魔女 「五という言葉で唱えたものはその場で死んでしまえ…その場に倒れて息が絶えてしまえーっ…」

アナンシ「いいことを聞いた…いいことを聞いたぞ…魔女のやつ…だれでも[片手を出して]この数字を口にしたものはその場で死んでしまう呪いをかけたな…これを使えばたらふくご馳走にありつけるぞ…さあ準備準備…[と下手に去る]」

12

魔女 「ん…？だれかが窓の外にいたような気がするが…気のせいかな…」

語り 「[魔女セットを下げながら] さあ…魔女の呪いでヒントをもらったアナンシは家に戻るとサツマイモをたくさん用意して動物たちが通る道まで運んできました」

■ 道端 ■

アナンシ「[下手からサツマイモの山を引きずりながら登場] さあ…こいつを使えばきつとうまくいくぞ…[と間隔を開けて山を五つ作る]ここにあるのはサツマイモの山だ…いくつあるかという…[と数えながら]ひとつ…ふた一つ…み一つ…よ一つ…[少し間をとって]次は…いわないよ…[片手出し]これだよな…この山を最後まで数えたやつは呪いにかかるんだからな…そうしたらおれがいただくのだ…良い考えだねえ…さあ獲物が来るのが楽しみ楽しみ…おや…向こうからお尻を振りながらアヒルがやってきたぞ…[アヒルが上手から登場]



アナンシ「おはよう アヒルさん ごきげんいかがですか」

アヒル 「おはよう…おかげさまで…あなたは？」

アナンシ「ええ…それがねえ…「ご覧の通りサツマイモを作ったんですがね…頭が悪いもんで いく山とれたか 数えられ

ないんですよ… [と山を数えながら] 一…二…このあとがダメなんです…すみませんが ご親切なアヒルさん…ひとつ数えてみてくれませんか？」

アヒル 「いいですとも [上手からゆっくり下手にいるアナンシに向かって一山づつ確認しながらゆっくり数える] 一…二…三…四…五…バツタリ [倒れる]」

アナンシ 「…いただきまーす…パッキリ [と丸呑みする] さーて…アヒルぐらい食べもまだまだお腹がすいているぞ…もっと大きな獲物がこないかなあ… [と上手を見て] おっ…来たぞ来たぞ…アヒルより大きな獲物が…ウサギだ…長い耳をパタパタさせながら歩いてきたぞ… [上手からウサギ登場]」

アナンシ 「おはよう ウサギさん ごきげんいかがですか」

ウサギ 「ありがとう おかげさまで…あなたはいかが？」

アナンシ 「ええ…それがねえ…ご覧の通りサツマイモを作ったんですがね…頭が悪いもんで いく山とれたか 数えられないんですよ…一…二…ここまではいいんですが、その後はたくさん…になっちゃうんで…すみませんが 数えてみてくれませんか」

ウサギ 「いいですともお安いご用…この山を数えればいいのね [上手から順に下手にいるアナンシに向かってゆっくり一山づつ確認しながら数える] 一…二…三…四…五…バツタリ [倒れる]」

アナンシ 「いただきますパッキン [と丸呑みする] …ほんとに魔女の呪いはたいしたもんだな…さーて…ウサギでだいぶお腹がふくれたが、もうちょっと食べたいな…小さい獲物でいいんだが… [と上手を見る] おおっ…来たぞ来たぞ…ちょうどいいのが…やってきたぞ…ハトだ [上手からハト登



場]

アナンシ「おはよう ハトさん ごきげんいかがですか」

ハト 「ありがとうアナンシさん…あなたは？」

アナンシ「おや？ わたしをご存じで…ええ…それがねえ…ご覧の
通りサツマイモを作ったんですがね…頭が悪いもんで
いく山とれたか 数えられないんですよ…すみませんが
数えてみてくれませんか」

ハト 「あら… [からかうように] アナンシさんなら数えられる
でしょう？」

アナンシ「それがからっきしで…いいですか…一…二…それからた
くさ一…こうなっちゃうんですよ」

ハト 「わかりましたやってみましょうねえ…[と上手のサツマ
イモの山に飛び乗りアナンシに向かって山から山へ移り
ながら数える]一…二…三…四… [挑発するようにアナン
シをみて] それからわたしの乗っている分 [と山の上に止
まる]」

アナンシ「えーっ？ハトさん…あんたの数え方はおかしいですよ…」

ハト 「まあ ごめんなさいアナンシさん それじゃもう一回…
[とこんどは反対側へ飛び移りながら数える]一…二…三
…四…それからわたしの踏んでいる分 [と山の上で挑発す
るように何回もジャンプ]」

アナンシ「違う違う…そんな数え方じゃだめだ一…」

ハト 「ほんとうに ごめんなさいアナンシさん 今度こそもう
一回…[とまた反対側へ飛び移りながら数える]一…二…
三…四… [挑発するように] それからわたしのすわってい
る分 [とアナンシの頭の上に座る]」

アナンシ「うわあーっ…止める止める…なんてばかなハトだ なん
て間抜けなハトだ いいか…サツマイモの山はこうやっ

で数えるもんだ…[思わず]いいかぁ…一…二…三…四…
五[バツタリ]」

■ エピローグ ■

| 5



語り 「五といったとたん アナンシはバツタリ倒れて死んでしまいました…[ハトがサツマイモの山を飛び移るたびに お・し・ま・い…の文字が一つづつ現れる…]」

★[ここでハトを魔女に置き換え]

語り 「ハトは魔女だったんだ…魔女は呪いの言葉を聞いたアナンシを許せなかったのですね…」

演出ノート

- 二人の場合、一人がアナンシ/語り/大道具操作…もう一人が魔女/アヒル/ウサギ/ハトを演じるといいでしょう
- 語りの部分は観客に素話をするようにゆっくりと語り、その上で必要な動作だけを動かすようにします
- 魔女のシーンは真剣に演じた方が良いと思いますが、アナンシと動物たちのやり取りは軽く演じます
- 特に呪いにかかって死ぬところと食べるところはサラッと進行しないと観客が混乱するようです
- ハトは魔女の変身したもの…という演出にする場合、台本の★を加えます